

英語教育

ENGLISH CLASSWORK

Vol. 62 No. 3 2010

主幹 佐野 正之

巻頭言

就業力とコミュニケーション能力

福岡教育大学理事・副学長 ● 高梨 芳郎

最近、大学経営で「学士力」や「就業力」という用語が使われることが多い。学士力は大学を卒業するまでにつけておく力で、就業力は職に就く力である。就業力は学士力の重要な構成能力で、新しい「大学設置基準」に就業力の育成が明記されている。キャリア形成は確実に現在の大学教育の基本的な要件になりつつある。

就職難の時代である。先頃、ある新聞で「企業は採用選考で学生のどこを見ているか」といった記事が目にとまった。日本経団連が会員企業1,283社を対象に行った調査結果である。これによれば、採用選考で最も重視した点は、第二位の「主体性」(60.6%)、第三位の「協調性」(50.3%)を大きく引き離して、「コミュニケーション能力」(81.6%)であった(複数回答)という。「専門性」(19.2%)は第9位で意外に低い。コミュニケーション能力の指導は就業力の育成に欠かせない。

「コミュニケーション能力の育成」は中学校や高等学校での英語教育ではなじみ深い目標である。だが、英語教育は外国語としての英語教育である。コミュニケーション能力の育成を標榜しても、生徒は単語や文法の知識が十分でないので、基礎的な知識をつける努力が先決であると教師は判断しがちである。その後にコミュニケーション練習である。ところが、生徒の授業時の本音を聞いたある雑誌の調査結果では、英語が苦手な生徒でも教科書の本文を参考にして対話文を作ったり、本文の感想を英語で書いたりしてみたい生徒も多いようである。

先の企業への調査ではコミュニケーション能力の数値は2001年では50.3%で、この10年間に約30%も重要度が増したという。外国語としての英語でのコミュニケーション指導は確かに難しい。だが、英語授業こそコミュニケーションの大切さや感動を体験できるものと思う。英語教師のコミュニケーション指導に期待したい。

文法とコミュニケーションにおける記憶の役割

福島大学教授 佐久間 康之



1. 記憶とは？

私たちは日常的に「記憶にない」とか「覚えていない」ということを口にしたり、耳にしたりします。しかし、「記憶」と一口に言っても、その種類は数多くあり、たいへん変わりやすく、得体の知れない摩訶不思議なものなのです。情報を保持できる時間の長さによって、感覚記憶(2秒以内)、短期記憶(2秒～30秒程度)、長期記憶(半永久的)に分けられます。いずれにしても、私たちが日常生活を行ううえで、最終的には長期記憶として情報が残らなければ、基本的な生活が行えないことは言うまでもないことです。その点では、ふだんの授業で指導する英語の文法やコミュニケーションに関する知識もいかに効率よく長期記憶の貯蔵庫へ取り込み、これらの知識を効果的に検索し、利用できるかが重要となってくるのです。

2. 効果的記憶法とは？ 整理整頓の上手い人？

たとえば、次の無味乾燥とした8桁の数字を5秒で覚えるように指示されたとします。

15641616

次の(1)と(2)のうち、どちらの方法を使用するのでしょうか。また、どちらが効果的な方法でしょうか。

- (1) 8つの数字を何回もくり返して覚える
- (2) 8つの数字を適当に語呂合わせをして覚える

(1)は「機械的学習」と言われ、単純に8桁の数字をくり返し言うことで忘れないようにする方法です。覚える方法自体は簡単ですが、特に意味づけがなされていないため、くり返し思い出してないと忘れる可能性は高い方法です。

一方、(2)は、たとえば「1564・1616→ヒトゴロシ・イロイロ→人殺し・色々」と自分の知っ

ている語彙をもとに意味づけをしていく方法、「有意味学習」です。この方法は(1)に比べ、意味づけをするという作業に時間を要しますが、一度、自分独自の意味づけをして覚えれば、語呂合わせの意味が思い出すときのヒント(適切な記憶手続き)となり、結果として忘れにくくなる方法でもあるのです。

ちなみに、例に出した8桁の数字は英国の劇作家William Shakespeareの誕生年および没年を示すもので、英語専攻の方であればよく知られた語呂合わせです。この例から言えることは、言語のさまざまな情報を自分の長期記憶の貯蔵庫に取り込む際に、自分の持っている知識をいかに上手く利用し、深く理解をしたうえで、どのように整理整頓してしまい込むかが鍵ということです。

上記の(1)および(2)の方法を「家(長期記憶の貯蔵庫)の整理整頓」にたとえると以下ようになります。新たに購入した日用品(授業での新出事項)を自分の部屋に保管する(取り込む)際には、①「単純に部屋の中に置くだけの場合」と②「品物の種類、用途により整理整頓を行って取り出し(検索→思い出す)やすくする、言わば適切な記憶手続きを踏んでいる場合」とがあります。どちらも部屋に品物が保管されていることに変わりはなく、取り出すことは可能かと思えます。しかし、限られた時間の中で必要な品物を取り出すとなると、どちらが迅速に取り出せるのでしょうか。言うまでもなく適切な記憶手続きを踏んでいる②のほうが、取り出しやすいでしょう。

また、①と②どちらの場合も、高い頻度で出し入れをしている品物は、使用頻度の少ない物に比べて取り出しやすいと言えます。その点では、以前学習した文法事項を同じ、または異なるディスコースの中で定期的に振り返るスパイラル的な学習は、既習事項を取り出しやすくし、重要であると言えます。

3. 文法とコミュニケーションの記憶における位置づけ

文法能力とコミュニケーション能力とは分離したのではなく、文法能力はコミュニケーション能力を構成する要素の一つとされています(Canale, 1983)。ただし、前記の②の記憶方法で学習順序にしたがって、文法事項をきちんと覚えたとしても、実際にコミュニケーション場面でどのように機能するのを経験しないと、文法情報の知識は保持できていても、円滑に瞬時に文法知識を検索し、実際の言語使用場面で文法知識にもとづき言語を産出するには多くの時間を要することとなってしまいます。

この状況をたとえるならば、自動車学校で、車の運転操作の一連の知識、メカニズムを理解し、これらの知識を保持できたとしても、実車による運転操作を円滑に行えるとは限らないということになります。両者は関連し合っているものの情報の勝手(ルート)が異なるのです。自動車免許を取得したばかりの頃は、意識的に緊張しながら車を運転していますが、その後、運転の経験(トレーニング)を積むことで、運転操作は無意識に行えるようになります。この例において、文法知識(自動車に関する知識)は「意味記憶」にあたります。また、実際に文法知識を駆使し、言葉として頭や体を使って言語を使用し、円滑に言語活動が行えるようになるコミュニケーション活動(実車での運転)は「手続き記憶」にあたります。この手続き記憶はトレーニングにより自動化が促進され意識をせずに作業を処理することが可能となるため、「潜在記憶」とも言われます。

この両者の関係において重要なのは、自動車の前輪・後輪のように、どちらか一方のみが重要なわけではないということです。たとえば、対話の場面において確かな文法知識があれば、言語的正確さ(accuracy)を伴い、相手に正確に自己主張を伝えることができ、また相手の発話の言語構造の推測も可能となります。一方、実際の言語使用場面でのコミュニケーション能力があれば、多少、文法構造が不確かでも流暢さ(flucy)により円滑に話を進めることができます。母国語とは異な

〈コミュニケーションを目指した文法指導の工夫〉

り、第2言語の話者の場合、「正確さ」と「流暢さ」の交わりを大きくすることは困難が伴いますが、両者の交わりが大きくなる指導を行うことが重要と言えます。

しかし、この交わりの難しさの要因の一つとして次の点も忘れるべきではないと思われます。近年、若年層に目立つ「コミュニケーション能力の欠落」であるとか「KY(空気が読めない)」との報道は、まさにコミュニケーション能力が言語力そのもの(言語的知識)とは必ずしも一致しないことを示していると言えます。中学校での英語学習の前段階で行う小学校外国語活動の目標である「コミュニケーション能力の素地」とはまさにこの重要性を解いているものと言えます。母国語(日本語)でさえも「空気を読むことができない」人は外国語でも然りです。

4. さいごに

文法知識を長期記憶の貯蔵庫に取り込み、定着させるにあたり、適切な記憶の手続きとなるコミュニケーションのスキル等も多々使用し、処理速度を高めていくことが、後の別の言語使用場面において、この適切な記憶の手続きを手がかりに既習の文法知識を迅速かつ的確に検索することにつながると言えます。

参考資料

Canale, M. (1983). From communicative competence to communicative language pedagogy. In Ricaheds, J. C. and Schmidt, R. W. (eds.) *Language and Communication*: 2-27. Harlow: Longman.

佐久間康之.(2006).「外国語としての英語を理解するには：言語処理における記憶の役割」 太田信夫 編『記憶の心理学と現代社会』177-186. 東京：有斐閣

新刊情報



400頁 / 定価1,500円
市田印刷出版

PASSPORT
～150の英語語源単語帳～
嶋津 幸樹 著

単語の構造を語源によって分析し、語と語の関係を有機的にとらえ、豊富な例文によって単語の使用法を整理した魅力あふれる英単語集。

「わかる・できる・表現したい」指導を目指して

宮城県仙台市立仙台青陵中等教育学校教諭 糸谷 俊哉



1. はじめに

「英語がわからない」…教員になって間もない頃、生徒からこう言われ、私は大きなショックを受けた。

「わからない」とは、何がわからないのか。注意深く観察してみると、生徒の使う「英語がわからない」にはたくさんの意味があった。たとえばそれは「文字と音」についてであった。アルファベットは発音できる。ところがアルファベットの組み合わせからなる英単語の発音はできない。また、「語順」が「わからない」という生徒もいた。日本語は「主語+…+述語」の形式をとるのに対し、英語は「主語+述語+…」の形式をとる。この英語の「語順」を習得できないのだった。

この2つの「わからない」を何とか「わかる」に変えたい。そう思ってこれまで取り組んできた実践例をいくつか紹介したい。

2. 「発音」指導

最初の課題をクリアするため、1年次の4～6月に発音の学習を取り入れた。次のようなステップで学習を進めた。

- (1) アルファベットがもつ個々の音(単音)を発音させる
例) b[b], c[k] [s] など
- (2) 他者が発音する単音を聞き、アルファベットで書かせる
- (3) 単音を用い、新出単語の発音を予想させる
- (4) 他者が発音する新出単語を聞き、書かせる

この発音の学習を通し、多くの生徒が新出単語を正しく発音できたり、発音を頼りに文字で書き表すことができるようになった。

ただその定着には時間を要するし、一度学習したことも時がたてば忘れてしまう。それを防ぐため、発音の指導は機会をとらえ、くり返し行っている。

また、発音学習はどうしても単調になりがちとなる。そこで、暗記・発表を中心とした会話(挨拶や紹介など)学習を並行して行った。

この学習は英語の力をつけるだけでなく、よりよい人間関係作りにもつながる。よりよい人間関係を構築し、よりよい学級の雰囲気生まれることで、授業の中で間違いを恐れず、自分の考えを発表できる雰囲気ができる。それはとりもなおさず、学級全体の学力向上にもつながっていく。そこで現在の会話学習では構成的グループ・エンカウンターやソーシャル・スキル・トレーニングの考え方や活動を参考にした「ペア活動」「グループ活動」を取り入れるなど、他者との関わりを考慮した指導過程にもとづいた実践を心がけている。

3. 「主語+述語」指導

2つ目の課題(語順の習得)をクリアするため、次に「主語+述語」の学習に取り組ませた。生徒たちは4～6月の発音学習や会話学習を通し、この時点でかなりの単語や英文を学習していた。学習の進め方は次の通りであった。

- (1) 品詞(名詞、動詞、形容詞)を理解し、主語は名詞を中心に、述語は動詞を中心に構成されていることを理解させる
- (2) 述語では一般動詞を用いる場合(SVO)とbe動詞を用いる場合(SVC)があることを理解させる
- (3) 平叙文における語順のルールを理解させる
- (4) 疑問文における語順のルールを理解させる

現在「主語+述語」の学習は、次段階である「文の意味を補足する学習(目的語や修飾語)」へと発展している。「主語+述語」の学習から始まる一連の「語順」の学習を通すことで、Mike not like soccerなどのミスはほとんど見られない。また、平叙文や疑問文の語順ルールを習得することで、述語に関する新出文法の理解が高まる結果が得られた。1年次で、現在完了形などの文の述語がわかり、ほとんどの生徒が疑問文や否定文を語順ルールにしたがって作り出せている。

4. 次なる目標

現在は「発音」学習や「主語+述語」学習を通し、英語に対する理解が深まり、生徒自らが学習

していく力が育ち始めている。ただ学習した内容を理解していても、なかなか活用ができていない。学習した内容の活用が「意識的なレベル」から「無意識的なレベル」に上がることが次なる目標になる。

このようなレベルで生徒に進んで英語を用いてコミュニケーションさせ、その力を定着させるには多くの課題をクリアしなければならない。

まず進んでコミュニケーションを図るためには、4～6月の会話学習で取り入れている「よりよい他者との関係作り」の他に、指導過程や教材を工夫しなければならない。

次にコミュニケーションの力を定着させるためには、学習意欲の維持や継続的な家庭学習が大切であり、学習した内容がくり返し出てくる指導過程の工夫も必要である。

また、生徒自身の学習として、4技能を総合的に身につけていくため、「読み取る学習」「聞き取る学習」「話す学習」「書く学習」を実践していかなければならないと考える。

5. 次なる目標のための取り組み

紙面の関係上、現在実践している中から、いくつかを選んで紹介させていただきたい。

(1) ドリル学習と課題解決型学習・生産型学習

進んでコミュニケーションを図るための取り組みとして、次のような段階を意識して指導を行っている。

- ①新出の学習内容を理解する段階
- ②新出の学習内容を練習する段階
- ③新出の学習内容を活用する段階

①について、新出の学習内容を理解するに至るまでの指導は大まかに「学習内容を提示し、使用場面を理解する」流れで進めている。使用場面を理解するために、精選した例文を準備し、グループによる話し合い活動を行わせている。

次に②についてであるが、新出の学習内容を練習する指導として「ドリル形式の練習」を数多く取り入れている。ここでの練習では、“Ladder”や“Battleships”などのゲームの要素を取り入れた活動を行わせることが多い。

最後に③の新出の学習内容を活用する指導として、課題解決型活動や生産型活動を取り入れてい

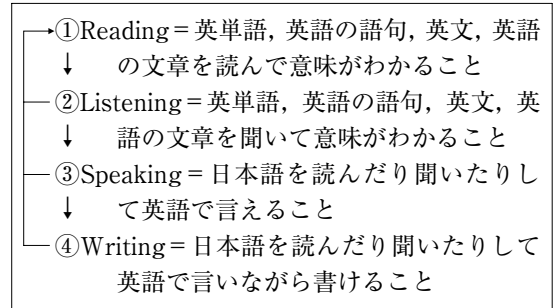
る。課題解決なのか生産なのかは学習内容により異なる。どちらの活動を選択するにせよ、大切なのは活動内容が生徒に意味のある活動であるということである。

(2) 4技能を総合的に身につけていく学習方法

コミュニケーションの力を定着させるためには、学習した内容を「くり返し練習し、使えるようになること」が不可欠である。一度学習した内容をくり返し使用する場面として(1)で述べた課題解決型活動や生産型活動は非常に有効である。一度学習した内容を使用する場面が必要とされるからである。

また、意図的に授業の導入段階で既習の学習内容を用いたウォーミングアップも実践している。

ただし、しっかり定着させるためには、授業のみでの取り組みだけでは不十分である。家庭での英語学習に次のサイクルで取り組むよう指導している。



これは英語教員なら誰しもが生徒に指示している内容だと思う。大切なことはこの学習サイクルを生徒に確実に実践させることである。

実践していくには根気が必要で、時間もかかる。そのために授業での確認テストや毎週の課題提出を求めている。また、家庭学習と授業の活動とをリンクさせる実践を行っている。学習サイクルの実践は次第に定着してきている。特に、④のWritingの段階では単語ではなく、英文を書かせる作業をさせている。このほうが新出単語の定着も高いようである(教員こそ根気が必要だと思う)。

6. おわりに

大げさかもしれないが「日々、試行錯誤」である。目標は明確か、方針は正しいか、活動内容はよいのか…本拙文にご指導を賜れば幸いである。

titotani@sendai-c.ed.jp

シンプルに 的確に 大胆に

山梨県南アルプス市立櫛形中学校教諭 鷹野 英仁



1. はじめに

英語学習における文法の存在が再認識されている。平成24年度から完全実施される新学習指導要領では文法は「コミュニケーションを支えるもの」と明記され、文法指導の重要性が示されている。実際のコミュニケーションにおいても、文法はその基盤をなすものである。私たちが言語を用いてコミュニケーションを成立させるためには、内在化した文法を共有していることが前提である。文法の共有は、コンピュータにたとえるなら、互いに共通のソフトウェアが備わっていて、ファイルを自由に交換して、情報をやりとりすることができる状態と同様である。よって、コミュニケーション能力の育成を目標とするとき、文法を重視することは必然であろう。

2. ルールは簡潔

言語の理解や生成の瞬時性から考えて、私たちが使用している文法は極めて簡単明瞭で、かつ汎用性の高いものと思われる。Radford(1997)は、内在する文法の簡潔性を、Grammars should be as simple as possible.と表現している。したがって、生徒に文法を説明するときは、時間をかけた丁寧なことばが、文法の理解を促進し、運用に際しての「使える文法」を習得させるとは限らず、むしろ単純明快なことばのほうがより効果的であると考えられる。

たとえば、重要であるが生徒にとってわかりにくいbe動詞の説明は、筆者は次のようなことばで示している。

「be動詞は、ある、いる、なる、状態です」

この説明にしたがえば、次のそれぞれの文法項目に属する文中でのbe動詞の働きが容易に理解され、また、英語で表現する場合も日本語の文末表現(述部)が表す内容に注意することで、be動詞

の過剰な使用やI studying English.のようなbe動詞の脱落を防ぐことが期待される。

Those books are in the desk.
それらの本は ある 机の中に
There is a boy in the room.
(そこに) いる 1人の少年 部屋の中
Yuki wants to be a teacher.
ユキは したい なること 教師に
I am happy.
私は 状態です うれしい
Be kind to old people.
状態でいなさい 親切な お年寄りに
Tom is eating lunch.
トムは 状態です 食べている 昼食
English is spoken in this country.
英語は 状態です 話される この国で

また、文の変形においては、be動詞、一般動詞、助動詞のある文、進行相、受動態、完了相の場合のように、その都度指導するのではなく、筆者は、疑問文への変形ルール、否定文への変形ルールとして、次のように提示している。

疑問：動詞または助動詞を主語の前に出す。
否定：動詞または助動詞の後にnotを入れる。

このルールで、be動詞および完了相のhave動詞は動詞を、それ以外の場合は、すべて助動詞(do, does, did, can, mayなど)を用いて文を変形することが、生徒に簡単に指導できる。

3. 基本は語順

英語の文法の本質は何か。英語では単語や句を並べる順序こそが文法の本質と考えられる。つまり、「語順」が文法の本質である。中嶋(2008)は、『わかる! わくわく英語ワークブック』(開隆堂)の中で、「英語は語順で意味が決まる」、「英語はやっぱり語順」と述べ、SVCとSVOを基本とした文

法定着のための指導を展開している。筆者も、英語と日本語の語順の大きな差が、日本人が英語を学習するときに、予想以上の困難さを与えていると考える。換言すれば、語順は発想の順序を表しているもので、学習者自身の考え方自体を転換することが迫られるのである。

そこで、筆者は、日本語の語順と英語の語順との差を埋めるため「橋渡し」として、次のような「英語語順の日本語」(英語順文)を導入して、日本文→英語順文→英文の流れを定着させ、日本語の発想(=語順)から円滑に英語の発想(=語順)に移行できるように工夫している。

次の文の〔 〕に適語句を入れよう。
(日本文) 私はきのう家族と東京へ行きました。
(英語順文) 私は〔 〕東京へ〔 〕きのう
(英文) I〔 〕to Tokyo〔 〕yesterday.

授業では、生徒の様子によって、空所の数や位置を段階的に調整したプリントを作成して、最終的には英語順文、英文ともにすべて空所で提示しても、素早く語句を入れられるようにくり返し練習を行う。

4. 文法を大きな枠で

〈動詞+ing形〉(以下、-ing)を例にとってみよう。-ingは、中学校では各学年次に、進行相、動名詞、現在分詞として、別々の文法項目で登場する。しかし、-ingは、本当に別々に分類された文法として存在するのであるだろうか。大西・マクベイ(2006)は、-ingのイメージは「生き生きとした躍動感、活動・行為が行われている真っ最中という躍動感」と述べている。

これを参考に、筆者は「形容詞は、ヒトやモノの状態、様子、性質を表す語」と了解させたいので、「-ingは『～をしている(状態)』という意味の形容詞の仲間」と提示し、「動名詞は形容詞が名詞に転用されたもの」と指導する。すると、従来の指導では別物に思われた個々の-ingが、一つの大きな枠で囲まれる感じになる。大きな枠で文法をとらえる感覚こそがポイントである。

I am running. 私は 状態です 走っている
I like running. 私は 好む 走っていること
I know that running girl.
私は 知っている あの 走っている 少女

このように説明すると、-ingは、状態の記述に使用するbe動詞と一緒に使うのが自然なこと、to runに比べて行為の躍動感があるので「ふだんからよく走っている」が意味に含まれること、さらに、形容詞なので名詞を修飾することが理解できる。加えて、動名詞=不定詞「～すること」のように学習したときには説明できない(It is ~to do)の文の仮主語のitを受けるものとして、-ingがto doと置換できないことも、-ingが元来は形容詞の範疇であることを認知していれば、一気に解決される。

他の例として、受動態と完了相に関しては、前述の-ingと同様に過去分詞を形容詞の一種としてとらえることで、大きくまとめることができる。また、前置詞句、後置修飾および関係代名詞は、英語の情報構造の流れの中で説明することで理解や習得が促進されると思われる。

5. おわりに

裁判員制度で、法律の「素人」である裁判員に裁判中に読んでもらう資料を作成するのに苦労しているというニュースを聞いたことがある。すべてを書いて説明する50ページの資料を作るのは簡単だが、要点をわかりやすくまとめた3ページの資料を作ることは非常に難しいとのことであった。教室での生徒も文法の「素人」である。余計なものが入らないが、必要なものは網羅されているようなシンプルで的確な指導を工夫して、それを大胆に行うことが、「コミュニケーションで使える文法」の指導に求められているのではないだろうか。

参考資料

- 中嶋洋一.(2008).『わかる! わくわく英語ワークブック』開隆堂
大西泰斗&ポール・マクベイ.(2006).『ハートで感じる英文法』NHK出版
Radford, A. (1997). *Syntax: A minimalist introduction*. New York: Cambridge University Press.

生徒の気づきをうながす文法指導！

—スパイラルに指導して、気長に定着を待とう！—

大阪府河内長野市立美加の台中学校指導教諭 古川 元庸



1. はじめに

「授業での練習時間を増やしたい」という思いから、この4年間、文法を説明する時間を極力削って、音読や音読筆写のようにたくさん読む・書く活動に大半の時間を使ってきた。英語をたくさん使う中で、自然に英語のルールを感じられるようになることを期待した。

結果として、時間がたっても教科書の音読がしっかりできる生徒、英文を書くことに抵抗感の少ない生徒が増えた。そして、英語で自分のことを表現する機会を増やすことができた。3年生の最後には、200語程度のスピーチをほとんどの生徒がやりきれたことは、量を中心に指導してきた1つの成果だったと考えられる。

しかし、最後の生徒アンケートでも「文法を指導してほしかった」という生徒も多く、3年生の最後になっても、期待していたほど「正確さ」については成長が見られない生徒も多かった。

結論としては、やはり「文法指導は必要である」と感じている。

2. どのような文法指導が有効か？

では、どのような文法指導が有効なのだろうか。私が心掛けている（心掛けたい）と思っているのは、次の2点である。

1. 「わかった！」と気づかせる
2. 短時間で説明する

中学校(高校)においては、文法の学習は、目的ではなく、手段であるべきである。文法指導は「コミュニケーション」をスムーズに行うためのものである。そう考えると、コミュニケーション活動でつまづいた(つまづきそうな)文法項目について、短時間で気づかせる(説明する)のが理想的だと考える。

具体的な方法として、2つ例示したい。

(1) 使える例文をたくさん提示する

気づくためには、その種類の英文にたくさん触れなければならない。教科書にはたいてい1つか2つの例文しか提示されていないので、そこからルールに気づくのは難しい。ただ、気をつけなければならないのは、その例文の質である。生徒が「使ってみよう！」と感じられる英文が理想であるが、少なくとも教師がその視点を忘れずに例文を探さなければならない。

【プリント：「比べる」より】

*Daisuke can run fastest in the second grade.

*USJ is the most famous spot in Osaka.

(後の活動「大阪紹介」で使える)

(2) 生徒サンプルから「まちがい探し」

昨年度担当していた3年生が後半に入っても、基本的な英文で間違いが多かったので、取り入れた活動である。

生徒が自己表現活動で書いた英文やテストから間違った英文を抽出して、その間違いを指摘させた。実際に生徒が自分の書いた英文をモニターする過程と似ているので取り入れたが、正しい(通じやすい)英文を書くために、文法を活用するという視点を与えられた点もよかった。授業では、その間違いを友だちに説明する活動も行ったが、生徒は楽しそうに取り組んでいた。

昨年度は3年生の後半から取り入れたが、文法のまとめとして、1学期から取り入れてもよい活動ではないかと感じている。

【プリント：「英文の間違いを修正しよう！」

(3学期期末用)より】

*Everyone looked me, so I was nervous.

(合唱コンクール感想より)

*We didn't have many time to buy souvenirs.

(修学旅行感想より)

〈コミュニケーションを目指した文法指導の工夫〉

3. 文法の導入と定着の時期については区別する

そう考えると、教科書で初出の文法項目を、時間をかけて説明することは避けるべきだと思う。

この点から、以前から疑問に思っていた「三人称単数現在(三単現)のsは、1年生の2学期に指導すべきか」について論じたい。

(1) 定着を求める時期を遅らせる

多くの教科書では、三単現は1年生の2学期に初出する。そして多くの先生が、「三単現のsで生徒がつまづく」とボヤいておられる。コミュニケーションの視点から考えると、三単現のsは優先順位の高い項目ではないはずだが、第三者を登場させるとどうしても三単現のsが含まれる。もし、初出の文法項目を、その段階で説明しようとするならば、「三単現のs」の指導は、1年生で指導しなければならなくなってしまう。

生徒の学習負荷や言語習得の順番を考えても、三単現のsを1年生の2学期で定着を求めるのは早すぎる。少なくとも、初出したページの学習が終わるまでに定着を求めるべきものではない。個人的には、2年生で定着を求めている、と考えている。

(2) 事前に口頭で十分になじませておく

もし、教科書の初出箇所、ある程度の定着を目指すならば、それまでに口頭でかなり三単現のsになじませておくことが必要だと思う。三単現のsを生徒に提示したときに、生徒が「あ～、あのsね！」というような状態になっているならば、教科書で初出したときに、ある程度の定着を目指した活動も有効かもしれない。小学校での英語活動が広く盛んになっていけば、そのような状態になる日が来るかもしれない。

三単現のsを例に話をしたが、多くの文法項目でこの考え方は、当てはまると思われる。どの文法項目を、いつ頃までに定着させるべきかについては、生徒の個人差もあり、難しい問題である。ただ、ここでは、「導入する時期と、定着を求める時期については区別して考えるべきである」という点を提案したい。

4. 教科書の構成について

教科書を執筆される先生方は、当然スパイラルな学習を考えておられると思うが、現場では「初出でたっぷり、後はさっぱり」の文法指導がまだまだ多いと感じる。

それを現場レベルで改善するために、2つのことを提案したい。

(1) キーセンテンスを書くだけにとどめる

ある文法項目が初出すると、その項目がキーセンテンスとして抽出され、それを練習する活動がいくつか併記される。これを受け取った現場の先生は「ここで定着させなければ！」と、長い説明としつこい活動で答える。そして、これでその項目についての学習が終わってしまう。これは自然な流れに思える。

しかしこれが、本文の下にキーセンテンスが書かれている程度であれば、現場の教師の印象も、大きく変わると思われる。

(2) 活動をくり返す

1年生の2学期で初出する三単現のsに焦点を当てた活動が、1年生の最後に、あるいは2年生1学期の最後にあれば、そこで再び焦点を当てた学習が行われる可能性が高いのではないだろうか。少なくとも1年生の2学期で定着を求めているメッセージは伝わると思うのだが…。

学習をスパイラルにしていくのは、基本的には現場の教師の責任だと思うが、教科書の影響が非常に大きいのも間違いなく事実である。新しく24年度に出版される各社の教科書が、そのような視点で編集され、現場にスパイラルな学習の重要さが、うまく伝わっていくことを願いたい。

5. おわりに

新しい指導要領では、文法指導の重要性も強調されているようだが、現場に下りてきたときに、言葉だけが残り、増えた1時間が文法の解説だけに使われていくことがないように心掛けたい。



27年目の今

—こんな考えで,こんな授業を—

北海道美唄市立美唄中学校教諭 中澤 泉



1. はじめに

教職に就いてかれこれ27年目を迎えた。年数的、経験的にみれば、ベテランと言われるようになってしかるべきだが、本人にはその自覚がない。英語の授業について考えるとき、新卒の頃、ベテランと言われる先生から「いい授業は数えるほどもない」と公言された。「そんなものかな?」と思ったが、実際いい授業はなかなかできるものではないことを改めて実感している。それでも、この27年の間には1万回を超える授業を実践している。拙い実践ではあるが、この紙幅を借りてどんな考えで、どんな授業を目指しているか紹介してみたい。

2. たどり着いた英語という言語について

最初の10年くらいは、英語という言語がどういう言葉なのかというようなことをほとんど考えずに授業をしていたように思う。しかし、荒木博之の『日本語が見えると英語も見える』(1994年 中央公論社)という本に出会って、日本語と英語はどのような特徴をもつ言語なのか意識するようになった。また、この本から中津燎子という人も知り、英語の教え方も変わってきた。そして、次のように自分なりにまとめてみた。

〈言語としての英語〉

- ①表音文字では音声が大変
- ②主語、動詞の語順で結論を先に述べ、かたまりで情報を加えていく言語
- ③単数、複数の区別が厳密で数えられる名詞になるときに数えられない名詞で意味が異なる
- ④音声面では、抑揚があり、リズム、強弱が大変

3. 学習するうえでの心構え

上記の英語の特徴を踏まえ、日本人がこの日本という環境の中でどのように学習したらよいか、生徒に平日頃伝えていることを書いてみた。

- ①とにかく、毎日少しずつ継続[1日1ページ]
- ②口・手・頭をフル回転
音読→暗唱、筆写→暗写、想像→絵を描く
- ③習うより慣れろ

とにかくまねて、使いながら覚える。Practice makes perfect!

- ④忘れること、間違えることを恐れない
間違えた分だけ本当の力となる。
- ⑤努力を楽しむ
やらされているという意識から、自分が進んで身につけるという心で。
- ⑥根拠のない自信をもつ
とにかく、学習していることがすごいこと。自分のよいところの発見。

具体的には、授業の始めて1日1ページのチェックをする。音読練習では、一人ひとりに1文を読ませてそれを全体でリピートする。プリントを用いて、日本語→英語、英語→日本語をペアで練習させる。スラッシュを入れて語句のかたまりを意識させ、主語・動詞を見つけさせる。T/F問題、英問英答で内容理解を確認し、その後は個人、ペア、全体で徹底的に音読させる。

4. 影響を受けた書籍

紙幅の都合により、一つひとつの内容は紹介できないが、これらの本から学んだことは多い。そこで得た知識は、私の実践の中で生きている。

- ①國弘 正雄(1970)『英語の話し方』サイマル出版会
- ②中津 燎子(1978)『なんで英語やるの』文藝春秋
- ③Jane Willis(1982) *Teaching English Through English* Longman
- ④荒木 博之(1986)『日本人の英語感覚』PHP研究所
- ⑤千野 栄一(1986)『外国語上達法』岩波書店
- ⑥寺島 隆吉(1989)『英語にとって授業とは何か』三友社出版
- ⑦遠藤 幸子(1992)『英語史で答える英語の不思議』南雲堂フェニックス
- ⑧佐伯 智義(1997)『科学的な英語学習法』講談社
- ⑨西江 雅之(1998)『ヒトかサルかと問われても』読売新聞社
- ⑩白井 恭弘(2008)『外国語学習の科学』岩波書店
- ⑪林 剛司(2009)『楽しい英語多読入門』丸善プラネット



新出言語材料にフォーカスを合わせた導入

—GDMの手法を用いた文法指導—

愛知県名古屋市長立笹島小学校・中学校教諭 植田 則康



1. はじめに

「もっと直接子どもたちを新出言語材料そのものに注目させる導入はないだろうか」

単元や授業の導入にはどんな内容にするか日々頭を悩ませてきました。実物、自作ビデオや寸劇などを通して、子どもたちの興味・関心を引きつけられるようになったものの、それだけでは物足りないと感じるようになってきました。そんなときに出会ったのがGDM(Graded Direct Method)でした。

2. TIEの取組について

GDMはSEN-SITの考えにもとづいた、日本語を介さない教授法です。ターゲットセンテンス以外は用いず、その中で子どもが英語と格闘している姿に私は感銘を受けました。

さっそく実践を重ねていくと(私自身の力量不足も手伝って)、GDMだけでは困難な点が出てきました。それは、①子どもたちがはっきりとした日本語とならないので不安視すること、②教科書の文法中心のシラバスと異なるので転用するための教材研究が重要なことの2つです。

そこで、TIE(Thinking and Talking in Englishという意味の造語)という活動を考えました。これは、GDMの手法は用いながらも、①子どもたちどうして確かめ合う時間を途中に設けること、②教科書の単元(新出言語材料)に合わせて指導をすることで、上記の問題点を解決しようとしたものです。

3. TIEの指導の様子

中学1年生の初めに行うTIEの活動では、日本語を介さずに自己表現につなげるという活動の趣旨を指導します。そして、最大の注意点である「日本語を決して使わないこと」や「状況の違いを注意深く観察し、まずは英語で使ってみる」を子どもたちにはっきりと意識させます。私のこれまでの経験では、最初にこの部分はしっかりと押さえておくとういと思っています。

TIEでは、まず、実物を用いて実際の動きを合わせて示します。その際、教師はターゲットセンテンス以外まったく話しません。子どもたちは示されたいくつかの状況を対比させて、考えながらその状況(=ターゲットセンテンス)を述べます。子どもたちは懸命に状況の違いを観察して、それに合わせた表現を口にします。

たとえば、2年生の未来を表すbe going toは以下の3つの文を実際の動きと合わせて示していきます(この時点で現在進行形と過去形は既習)。

- ① I am going to put the poster on the wall.
- ② I am putting the poster on the wall.
- ③ I put the poster on the wall.

教師は、ALTや指名した子どもにも実際に状況に合った動作を行わせる中で、子どもたちはyouやhe/sheなどを用いながら、それぞれの立場から英語を話します。ただし、子どもたちは考えながら話すため、英語としてはかなりたどたどしく声も小さめです。これらをくり返した後、子どもたちどうして表現を確かめ合わせます。この時間を設けることで、子どもたちの表情はさらに明るくなり、声の大きさにも変化が現れます。口頭練習後は、ワードカードを用いて文の音読練習を行い、書き取りテストを行うことで、一連のTIEの活動となります。私の場合、続いて疑問文や否定文の指導を合わせて行っています。

4. おわりに

TIE自体はかなり地味であり、私は半ば自虐的に「怪しい時間」と呼ぶこともあります。ただ、同じオールイングリッシュでも、実際の状況のコントラストから英語で表現することで、子どもたちが新出言語材料自体に注目する手応えを感じながら取り組んでいます。なお、副次的ですが、TIEを始めてから、子どもたちの注目が教師により注がれるようになり、他の活動もしやすくなってきたことを付け加えておきます。

第58回 中村英語教育賞入選論文発表

第1位：高校段階の自由英作文指導における論理的表現力の育成を目指した取り組み

広島県立安古市高等学校 久山 慎也

第2位：中学生を対象とした第二言語語彙習得に対するフラッシュカードの影響

群馬県安中市立松井田東中学校 福田 昇

第3位：JTEが英語で授業をする意義

—高校入門期における生徒の意識・学習効果の変容について—

石川県立金沢桜丘高等学校 前田 昌寛

◆ 審査員 ◆

佐野 正之(審査委員長・横浜国立大学名誉教授)

山岡俊比古(同副委員長・兵庫教育大学教授)

白畑 知彦(静岡大学教授)

高梨 芳郎(福岡教育大学教授)

萬谷 隆一(北海道教育大学札幌校教授)

論文審査にあたって

審査委員長 佐野 正之

今回で実に58回を数える、全国的に知名度の高い伝統ある「中村英語教育賞」に、合わせて10件の労作が寄せられ、審査員一同非常に嬉しく審査にあたることができましたことをご報告し、厚く御礼申し上げます。

自由題を含めて4種類の課題に対して、中学校の先生4名、高等学校・高等専門学校の先生7名のご応募をいただきました。どの論文も力作揃いで、審査は難航いたしました。最終的には、上位3点を選出することができました。

審査にあたりましては、5名の審査員が慎重に審査し、その結果を踏まえて総合的な観点から委員長と副委員長との間で最終審査を行いました。その結果、上記3点の入選作を決定いたしました。審査基準につきましては、従来からの5つの観点、独創性・発想力、内容の充実度、構成力、表現力、応用性・実用性から審査を行いました。

入選作の講評などについては次号に掲載いたします。ご期待ください。

英語教師の裏ワザ

英語で表現させて気づきを起こさせる Picture Description

北海道洞爺湖町立洞爺湖温泉中学校教諭 大塚 謙二

表現力を高めるには、英語で表現させなければなりません。interaction仮説では、native speakerとのinteractionを通して修正フィードバックを得ることにより学習者の英語力が向上するとされています。「では授業で効果的にそれをできないか」と考え、Picture Descriptionという活動を作りました。

活動時間は5分

【用意する物】

- ①英文を書かせる紙
- ②お題になる絵・写真
- ③和英辞典

【活動方法】

- ①生徒に用紙を配布する
- ②お題となる1枚の絵を黒板に貼り付ける
- ③生徒はお題を見て3～5分間でできるだけ多くの英文でその絵を表現して書く

実際、ピンクのエプロンをつけた女の子が料理をしようとレシピを見ている絵を提示すると“The girl is going to cook.” “She is cute.” “Her hair is black.” “She looks happy.” “There is a recipe on the table.” “She is reading something.” “She likes pink.”などの既習事項を使った英文が、色々な見方から出てきました。最初は三単現のsや、進行形のbe動詞がなかったりしますが、活動をくり返すうちに気づく生徒が増えてミスが減ります。

パターン1：グループで書く活動

最初はこの形式が有効です。互いに助け合い、教え合い、協力する気持ちが育ちます。学級内を4～6人の班に分けて、B4の紙とフェルトペンを配布。教師がお題となる絵を黒板に提示。それを見て英文を全員で考える。班で行うと英文を書

く生徒、英文を考える生徒、日本語で考える生徒、辞典で調べる生徒、など自然と役割分担ができます。時間になったら紙を回収し、黒板に貼り、教師が英文を採点します。1文につき、意味がわかり許容できる英文なら1点、文法的に正しければ1点、綴りが正しければ1点の合計3点。採点時には生徒たちにフィードバックを与えます。多少時間はかかりますが、こうすると他の生徒へのフィードバックが全員に気づきを起こすチャンスになります。

パターン2：個別に書く活動

班である程度続けたなら、慣れてくるので活動を個に戻します。B5の用紙orノートに同じように活動して授業後に集めて、赤ペンで修正してフィードバックを返します。ALTがいるときはお願いして、コメントも英語で書いてもらおうと効果的です。ノートだと自分のミスの傾向がわかるし、次のときに前回のを見て参考にすることもできて効果的です。

パターン3：個別に発話する活動

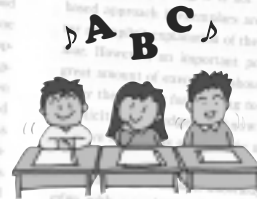
これはスピーキング活動として行うこともできます。全員起立の状態、黒板に絵を貼り、1つの文を言えた生徒から着席する。英文に文法的に間違いがなければ2点、1つか2つの誤りはあるが、十分理解できる文ならば1点というようにポイントを与えると活発になります。

この活動では、古いピクチャーカードも再利用できるし、行事の生徒の写真やテレビにデジカメで映したりすると主語が個人名やI/Weも使えるようになります。また、この形式は英検の2次面接のパターンと似ているのでトレーニングに最適です。

連載：小学校英語，中学校にどう生かす？

第3回

音声への慣れ親しみを生かす
発音指導



群馬大学教授 上原 景子

1. はじめに

小学校の英語活動では，英語を通じて以下の3つを行いながら，「コミュニケーション能力の素地を養う」という目標の達成を図ろうとしています。

- (1) 言語や文化についての体験的な理解を深める
- (2) コミュニケーションへの積極的な態度を育てる
- (3) 英語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる

今回は，このうち「音声への慣れ親しむ」を中学校の発音指導にどう生かしたらよいかを考えます。

2. 「音声に慣れ親しむ」ための活動とは？

英語活動は，子どもたちの発達段階の特徴である「柔軟な適応力」を生かすため，音声面を中心として行われます。そのため「言語や文化に関する体験的理解を深める活動」や「コミュニケーションへの積極的な態度を育む活動」の中で，英語の音声に慣れ親しませ，日本語との違いや言葉のおもしろさ・豊かさに気づかせることを目指します。さまざまな活動を通して，英語をたっぷり聞いたり使ったりしながら英語のリズムやイントネーションを体得することで，慣れ親しみや気づきに至ることが期待されています。こうした英語活動の成果を中学校で生かすために，まず，音声に慣れ親しむための活動がどのように行われているかを「英語ノート」の例を交えながら，見ていきましょう。

(1) ゲーム的な要素を取り入れた聞き取り

英語活動では，英語の音声をしっかり聞き取らせるため，ゲーム的な要素を取り入れた活動を数多く行います。たとえば，英語の数を使って行う「キーワード・ゲーム」では，子どもたちがペアになって消しゴムを真ん中にして向き合い，キーワードとされた数が発音されたときに素早く消しゴムを取ります（『英語ノート1』Lesson 3）。ゲーム的な活動は，集中して英語の音声を聞き取り，紛らわしい言葉を識別することに楽しく挑戦する「しかけ」となっています。

(2) 外来語の活用

英語活動では，日本語と英語の発音の違いに気づかせる1つの方法として，外来語を活用しています。たとえば，『英語ノート1』では，自己紹介の活動（Lesson 4）で好きな果物・動物・スポーツなど，また，衣服の買い物活動（Lesson 5）で色などの日頃よく使う外来語をその英語と対比させる工夫がされています。その後の「外来語を知ろう」（Lesson 6）では，バナナ・ゴリラ・カメラ・カレンダーなど18語の聞き取りやレストランで注文した物（サラダやケーキなど）の聞き取り，友だちと好きな果物をたずね合ってフルーツ・パフェを作る活動などがあります。さらに，友だちと意思疎通を図りながらランチ・メニューを作る活動（Lesson 9）では，多くの食べ物の外来語を使っています。このように，英語表現を聞いて絵から選ばせるなど自然に聞き分けさせる活動から，「外来語と英語の音の違いに注意してやってみよう」と明示的に気づかせる活動へなど，聞き取りからやりとりで使えるようにするまでの工夫が施され，外来語の活用は，子音が続く，子音で終わる，音節構造が違うなどを始め，英語の音声の特徴に慣れ親しむことに有効な方法となっています。

(3) チャンツの活用

英語活動では，英語のリズムの特徴をとらえさせるためにチャンツをよく活用しています。日本語のリズムがほぼ同じ長さの拍で作られるのに対し，英語のリズムは強音節が同時間隔的に起こり，強勢を受ける語を中心に作られます。そのため，英語はシンコペーション的に強い語と弱い語の組み合わせで発音されるので，日本人学習者には難しく，こうしたリズムに慣れることは，聞き取るときにも話すときにも非常に大切です。それぞれ9つあるlessonのうち，『英語ノート1』は6つ，『英語ノート2』は7つのlessonでチャンツを扱っています。チャンツの活用は，リズムの把握と同時に，語と語の連結とそれによって起こる音の変化などに慣れ親しんでいくことにも有効です。

(4) 歌の活用

英語の歌もよく使われていますが，日本語と異なるリズムや音のつながりなどに慣れるのに有効な方法です。身体の部位に触れるなど動作を合わせる歌もあり，楽しく英語のリズムや音に慣れ親しむことができます。

(5) ネイティブ・スピーカーの存在と視聴覚教材

新学習指導要領は，積極的にネイティブ・スピーカーに協力を求める，CD・DVDなどの視聴覚教材を活用するとして，自然な音声を直接聞かせることが「慣れ親しむ」への原点であることを示唆しています。英語活動にALTが関わるが多いことや『英語ノート』のCDはネイティブ・スピーカーの自然な速度の英語であることから，英語活動を通して子どもたちが自然な英語に触れていることが伺えます。

3. 「慣れ親しむ」から「正しく」へ

小学校の「慣れ親しむ」とは対照的に，中学校ではコミュニケーション能力を支える基礎的なスキルの育成が期待されています。中学校の新学習指導要領では，「強勢，イントネーション，区切りなど基本的な英語の音声の特徴をとらえ，正しく聞き取ること・正しく発音すること」が内容に，a～eが言語材料に挙げられています。

- a. 現代の標準的な発音（偏りのない発音，母音や子音の数，子音が続く，子音で終わる）
- b. 語と語の連結による音変化
- c. 語，句，文における基本的な強勢
- d. 文における基本的なイントネーション
- e. 文における基本的な区切り

これらを踏まえながら，英語活動で培った英語の音声への「慣れ親しむ」を生かして，「正しく」聞き取り発音できるスキルを育てるための方法を次の(1)～(6)を含めて考えて行きましょう。

- (1) 日本語との対比を通じた音の種類習得
- (2) 聞き取り・聞き分けに挑戦する「しかけ」
- (3) 音から文字へ，文字から音へ
- (4) 文字を見せての音のつながりと変化の確認
- (5) 文脈に合ったイントネーションと区切りの習得
- (6) ALTの存在の活用

中学校では，英語活動での英語の音への大まかな気づきを，日本語との対比を通して明確化，体系化していくことが必要です。たとえば，母音の

数が日本語よりも多く，[ア]に近く聞こえる音には[a]，[ɑ:]，[æ]，[ʌ]，[ɔ]があることなどをミナル・ペア（例：capとcup）で提示し，聞き取り・聞き分けの挑戦をする「しかけ」を作ることが有効です。発音表記は必要に応じて補助的に使いますが，その使用にかかわらず，日本語より細分化されている音やまったく違う発音に関するトレーニングを行う必要があります。集中して聞き取る・聞き分ける活動には中学生も十分価値を見出すはずなので，文字の導入時には絵や写真を併用し，導入後は簡単なディクテーションなどを交えてもよいでしょう。

音と文字の対応を図る活動としてフォニックスを用いるのは有効な方法ですが，簡単なものをすでに取り入れている小学校も多いこと，フォニックスには非常に多くの規則があり，干渉も起こりうることなどに配慮する必要があります。コミュニケーションには，「話し言葉」によるものと「書き言葉」によるものがありますが，これまでの研究で，書き言葉のときでも頭の中ではinner speechという言語活動が行われ，音声に関わるスキルが重要な役割を担うことがわかっています。「音声への慣れ親しむ」を生かしていくには，文字だけ・音だけでなく，音読を基盤とし，絶えず音から文字，文字から音を意識した活動を行い，読んで話す・書いて話す・聞いて書くなどの統合的な活動へ発展させることをお勧めします。文字を見せて聞かせることで，つながったり変化したりして聞こえる音が何の語かははっきりわかるので，文字を見せながら自然な速度で英語を聞かせ，音読させることは重要な意味をもっています。

英語を聞かせる際に強弱のリズムに注意させてチャンツで養った感覚を一層伸ばしていくことは，意味のまとまり（区切り）の把握や文脈に合ったイントネーションの習得に有利です。また，文字を見せてリズムをとらえる活動を加えることで，弱く発音されることが多い大切な機能語や語尾変化も習得しやすくなります。

最後に，音声のスキルの育成では，英語活動に続いてALTの存在を生かすことが大切ですが，ALTは単なる「英語使用や音声のモデル」でなく，「コミュニケーションの相手」，そして「異文化の情報源」というとても大切な役割も担っていることをあえて強調しておきます。

電子辞書の功罪

今さら言うまでもないことだが、電子機器の進歩は我々の生活様式を急激に変えている。携帯電話によろやく慣れたと思ったら、今度はsmartphoneとやらの到来で、もはや「電話」の通話機能というのは副次的なものになりつつある感さえある。

読書という身近な行為にしてもしかり。米国ではAmazonからKindleという電子書籍端末が発売され、電子書籍ブームが起きた。すると今年になってAppleが電子書籍端末機能をもつiPadを発売して、アメリカでは販売開始1か月で100万台が売れたそうである。

実は私もKindleとiPadを使用している。軽量なのに驚くべき数の書籍が入るので、本棚があふれて床にも本が積んである身にとってはありがたい。通勤電車の中の読書に重宝している。英英辞典が組み込まれていて、本を読みながら、簡単に単語の定義を調べることができるので、英語学習者にとっても、英語の本を読むのが格段に楽になったと思う。

楽になったといえば、電子辞書の出現もそうであろう。あの小さい機械1つに、英和・和英・英英・国語・漢和辞典、百科事典、シソーラスなどが入っていて、すこぶる便利だ。それを全部紙の辞書・辞典で行おうとしたら、相当な量、重さになるだろうし、そもそも持ち歩きなどできまい。

当然、最近の学生は紙の辞書よりも電子辞書を使っている人が圧倒的に多い。私事で恐縮だが、甥が今年、高校に進学した。お祝いに何がよいか聞いたところ、電子辞書が欲しいと言われた。進学先の高校では、2つの電子辞書が指定され、紙の辞書はいくつか参考図書として挙げられているだけだったそうだ。甥は現在、紙の辞書は使っておらず、家でも学校でも電子辞書を使っている。

私が今期担当している大学の英語の3クラス(1年生向けの総合英語2クラス、2年生上級向けの聴解・口頭表現の1クラス)で聞いてみたところ、9割以上の学生が電子辞書を所有しており、

さらに驚いたことに、紙の英和辞典を家あるいは大学で普段使っている学生は1割にも満たなかった。

もちろん紙の辞書に書かれている内容は電子辞書にもあるだろうから、それ自体はどうと言うことはないと思われるかもしれない。問題は学生が電子辞書をどう使っているかである。聞いてみたところ、単語の意味を調べて終わりという学生が一番多く、語法や例文まで、きちんと読む学生は少数派であった。

紙の辞書だと、発音、語義、語法、熟語、用例、語源などが自然と目に入る。調べようとしている単語と綴りが近い単語も目に入る。それに対して電子辞書の場合、検索した単語だけを調べる。たとえば、語法や用例を見たかったら、ボタンをさらにもう1回押さなければならなかったりする。

このextraな操作をしないがために、貴重な情報を逃している。私が学生だった昔と比べて、最近の英和辞典は、英語圏の非母語話者向けの英語学習辞書編集の飛躍的な発達の恩恵を受けて、優れたものが各種出ている。そういった英和辞典の優れた部分を利用しないで、「単語の意味」を調べるだけでは宝の持ち腐れであろう。

語彙の学習においては、最小限の時間で必要な情報だけを得るといった能率追求は、実は案外効率がよくなく、見出し語の項目を一通り読んでみたり、それこそ、辞書をばらばらと「読書」してみるといった、一見すると回り道の学習によって得られるものは大きいのではないだろうか。

学生にも、少なくとも大学で電子辞書を引くときには、必ず語法、例文まで調べ、家では紙の辞書を使うようアドバイスし、甥にも今度は紙の辞書をプレゼントしようと思う。

(東京外国語大学准教授 中村 彰)

投稿を歓迎します

英語教育に関する問題提起、実践報告、研究などの投稿をお待ちしております。締切は特にありませんが、本誌は今後、2010年9月、2011年1月、3月、5月にそれぞれ発行の予定ですので、原稿到着の時点で掲載号を決めさせていただきます。規定は以下のとおりです。ご不明の点は編集部までお問い合わせください。

- ① 22字詰×72行以内(本文分量)
- ② 二重投稿はご遠慮ください。
- ③ 採用分には薄謝を進呈いたします。